

## 地域コミュニティと内発的経済<sup>1</sup>

調査研究部 川井 真

### 1. はじめに

わたしたちはいま、文明の転換点に立っているように思える。進歩史観によって語られる文明論的進化という文脈をたどれば、人類は新たな発見と革新的な発明を繰り返しながら技術的進歩と社会的発展を遂げてきたとされ、それは人類が理想の状態へと向かう進歩であり、社会は着実に豊かになっていくと説明されてきた。たしかに、知恵と技術が結実して社会に投影されることや、未知の世界への扉が開かれることは、わたしたちに夢や感動を与えてくれる。

しかしいま、現代文明が直面している歴史的な変革への要請は、必ずしもこの“夢”や“感動”を伴うものではないのかもしれない。巷で囁かれたいたしたイノベーションや社会創造という話題の背景にあるのは、閉塞感が漂う現代社会と失われつつある未来に向けられた、得体の知れない不安が作り出す苛立ちにも似た感情である。それは現代社会を構成している——政治システムや経済システムを含む——コントロール不能な巨大な社会システムへの不信感が徐々に増幅していった結果、俄かに顕在化しはじめた不安といってもいい。

人間中心主義によって作り出された高度で複雑なシステムが内包する構造的なリスクを確認し合い、とりわけ近代文明を支えてきた

科学への盲目的な信頼を捨て、それを懐疑的に捉え直すことが、いま、求められはじめたということでもあるのだろう。なぜなら、今日までの進歩と発展の営みのなかにこそ、問題の根源と変革へのヒントが隠されているのではないかという感覚——確証のない漠然とした感覚——を誰もが抱いているからである。

しかし文明が逆行することはなく、それは常に更新を繰り返している。文明というのは重層的なものだからである。過去から積み上げられたすべての智慧が土台となって、新しい文明は生まれる。まず、この事実だけは確認しておきたい。それを踏まえて本稿では、人間と自然との関係を再評価することから文明を捉え直してみたいと思う。そして現代文明を支える資本主義経済の暴走に警鐘を鳴らし、古くから存在する贈与経済の新たな可能性を、日本の集落機能に見出してみたいと考えている。

### 2. 終わりなき進化の終焉

近代文明は第二次産業革命を契機に形作られたといえるが、文明の勃興と産業革命の関係は以前にも見ることができる。狩猟採集社会は新石器時代に入ると農耕牧畜社会へと移行していくが、このような生活様式の変容を——社会文化的進化として——社会学あるい

1 主として地域の内発的発展を生み出す経済活動を意味することが多いが、本稿においては、新たな価値創造という視点ではなく、地域が包摂する人材、技術、産業等の水平連携によって、集落の内部で緩やかに循環してきた、従来から存在する経済活動という意味で用いている。

は人類学的な視座から捉え直せば、この変容をもって第一次産業革命と呼んでもいいのかもしれない。

しかし、さらに歴史を遡れば、たとえば人類は道具の使用や加工技術を習得し、火を活用するための知恵を生み出し、また言語によるコミュニケーション能力を高めていくが、これらが文明を勃興するための基層部分を構成し、人類の進化を決定付ける重要な要素になったことは明らかである。この文脈における産業革命を正確に表すならば、そこには情報革命とエネルギー革命も内包していると言ふべきであろう。これらは人類史という大きな物語の一局面で互いに連動し、位相のような関係を保ちながら動いている。

いわゆる産業革命は、狩猟採集社会が農耕牧畜社会を経て——大量生産・大量消費の社会を生み出すことになった——工業社会を構成しながら消費社会へと移行するという工程を辿るが、情報革命はこれに重なり合うように発展を遂げていた。すなわち言語を精緻に発達させ、活字文化を作り出し、その後のマス・メディア社会を経由して、現在ではICT技術を駆使したインターネット社会を推し進めていったのである。

さらにエネルギー革命においては、火の応用によって炉の仕組みが開発されると金属加工が可能になり、国家が形成されるようになる頃には火薬が発明された。石炭のエネルギー転換は第二次産業革命移行への道筋を作り、後期近代のエネルギー需要を支えたのは主に石油と電気であった。話題の原子力エネルギーの活用は、文明学者アンドレ・ヴァラニャック (Andre Varagnac) によると第七次エネルギー革命であるとされる<sup>2</sup>。

まさに人類は終わりなき進化の道を進んできた。わたしたちは近年に至るまで、未来はいまよりも豊かで、そこには希望に満ちた世界が待っていると信じて疑わなかった。しかし、いつの頃からか、自分たちは出口を失った危険な洞窟の中をただ彷徨っているだけなのではないか、というような閉塞感を、多くの人々が感じ取るようになっていたのではないだろうか。

たしかに、後期近代に発達したグローバルな市場経済に支えられる現代人の生活は、莫大なモノとエネルギーを生産し、消費し、再生産を繰り返す構造の中で営まれ、それに依存することなく安寧を維持することが不可能な生活様式へと、いつしか変容していた。そしてわたしたち自身も、このような巨大な社会システムに依存して生きることしかできない、バラバラに分断され、外部との結びつきを失った個人でしかないことに、誰もが気づきはじめていたからだろう。

この意識が芽生え始めるきっかけとなったのは、リーマンショックに端を発する世界的な金融不安であったり、食品偽装や建築偽装など、システムに内在する構造的なリスクの顕在化であったりもするが、このような感覚が確信に近いものになったのは、3.11東日本大震災後に起こった福島第一原子力発電所の瓦解に伴う、日本史上経験したことのない新しい災禍との遭遇であろう。

原子力発電という技術の安全神話が崩れると同時に、放射能という未体験のリスクに晒され、わたしたちは暴走する科学によって作り出される強大なリスクを、身を持って経験することになった。それだけではない。政府や専門家と称する人々の発する言葉が説得力

---

2 中沢新一 (2011) 『日本の大転換』 集英社新書、pp. 26-28

を失い、メディア報道についても信憑性という観点から疑問が投げかけられた。いま明らかに、ひとつの文明が終焉を迎えようとしている。ラディカルに、そしてダイナミックに、現代文明の再構築を始めない限り、未来は閉ざされたままになってしまうのではないだろうか。

### 3. 日本人の思想とコミュニティの原点

わたしたちはどこかで進むべき道を誤ったのかもしれない。日本の近代化は明治維新を契機に始まっている。この時代は列強支配からの回避という文脈で語られることが多いが、当時の主導者たちはひたひたと忍び寄る海外の脅威に緊迫の様相を呈していた。喫緊の課題は日本国の建設であったが、まさに文明開化は、国民国家を推進するための手段となった。また、そのためには国家の存在を絶対的なものとする要請に応えなければならず、思想の統一を国家神道の導入をもって実現しようとした。後述するが、ここに根源的な問題が潜んでいるように感じられる。

ここでいう近代化とは、蛮人によって構成される共同体を解体し、時代遅れになった世俗的慣習を捨て去り、科学を導入することで合理化や組織化を推進することであった。しかしながら、そもそも日本における思想や文化は、西洋とは異なる一種独特の多層的な構造を持っていた。士族、都市住人、そして農民という縦の階層と、主に農山漁村に展開される小規模集落という横の階層が縦横に入り組み、そのすべてが微妙に異なった思想的・文化的背景をもった生活様式を作り上げていたのである。ここには一切の優劣の差はない。

士族階層に深く浸透していたのは国家主義

的な色彩を放つ儒教（儒学）であるが、農村を中心とする集落では、アニミズム的民族思想に仏教や道教が習合した民間信仰が発達し、多種多様な生活様式を作り出していた。しかし、明治政府が目指す近代化の推進過程では、経済力や軍事力の強化を目的に教育体系の整備が進められたが、そこに道德主義的思考を植え付けようとする思惑が入り込んだことにより、多様性を持つ村々の思想や慣習は解体されてしまった。それに代わって国家神道による思想的統一化が図られていくことになる。このような経過をたどって、国民国家という幻想のナショナリズムが構成され、一方では、科学による西欧化を強力に推進することで、人間中心主義を理想とする思想が浸透していくことになったのである。

この時代を生きた思想家である福沢諭吉が記した『文明論之概略』には、明治政府が復古主義的な体制に傾斜していくことへの危惧が随所に書かれている。福沢が理想とした真の近代化とは、文明国としての日本を創り上げることであり、一身独立は学問によって成るという強い信念を貫こうとしたものである。福沢は文明国を実現するための方法論として、学問によって民衆の意識や習慣を変えていこうとする、地道で壮大な目標を持っていた。それにも関係するが、同書第六章「智徳の弁」において、科学的知識とは何であるかを道德と対比させながら解説している。

しかし、ここで気になるのは、福沢は小規模集落における文化的風習なども、それを単なる因習として捉えていたのではないか、という微かな不安である。そもそも反宗教的とりわけ反キリスト教主義であった福沢が、農村社会に根付いた思想としての民俗信仰の存在論的意味を正しく理解できたかどうかは疑

問である。欧米における支配的な宗教教義や国家主義を内包する儒学とは異なり、共同体を維持するために機能してきたアニミズムと民俗信仰は、福沢が伝えたかった学問とも融和的なはずである。

農村地帯はそもそも分権的であり、集落は住民による自治圏を構成していた。もちろん時代背景が異なるため視線の向かう先が分かれるのも当然である。また、これからグローバルな資本主義経済という大海原へ門出する状況と、資本主義経済自体にかけりが見え始めた今日では、スタートラインにおいても足並みをそろえようがない。ただ、人間の営みと歴史のなかでは失ってはならないものが必ずあり、その観点から眺めれば、時間と空間の開きが一気に縮まるほど、この時代と現代は重なり合う条件が多い。しかし、いずれにしても、福沢が目指した文明を日本において実現することは、結果としてできなかった。

#### 4. 内発的経済と贈与の思想

さて、日本社会の構造的な特殊性を踏まえると、小規模集落における共同体機能の衰退と、直面している文明論的諸問題との間には、何らかの因果関係があると考えても不自然ではない。

明治政府が推進した国民国家構想によって市町村制が導入された段階から、日本は国、県、そして基礎自治体としての市町村、という序列がなされ、集落は市町村に吸収されて国の最下部機関に位置づけられた。その後も市町村は、行政問題や人口問題などにより幾度となく合併を繰り返し、現在では集落のあった痕跡さえも失われた地域が散見される。また行政機能を維持するためにさらなる広域合併を行ったことで、大都市と農山村が入り

混じった、全体としては都市か農村かの区別もつかないような自治体も出現している。

そもそも地域とは市町村ではなく集落であるが、自然災害のような災禍でメディアなどに登場しないかぎり、わたしたちの視線の先に集落の存在が映し出されることは少ない。本来集落とはそういうものなのだろう。

もし文明論的なスケールでダイナミックに社会構造の大転換を図ろうとするのであれば、集落という共同体機能の再生は重要な意味を持つ可能性がある。再考すべきは集落が担ってきた社会的な役割と経済的な機能であり、そして住民のアイデンティティを支えてきた生業の意味である。

グローバル化する市場経済と内発的に進化する地域経済を分離し、集落としての自治圏を再構築することから始めるべきであろう。新しく組み替えることで完成する社会構造は、これまでのような国から下りてくるシステムではなく、集落が自立し、集落間で交流し、それが結ばれて基礎自治体へと広がり、基礎自治体を経由してさらなる交流が生まれるような仕組みであり、この段階で基本構造がほぼ完成する小規模な経済圏を有する社会モデルである。

では、ここに生じる経済活動、すなわち内発的経済の可能性を探るため、集落が本来持っていた機能について少し確認をしておきたい。

そもそも集落の住民は、それぞれが自立した社会的アイデンティティを有するコミュニティの成員である。その意味では誰もが地域に必要な生業を持つ。とりわけ農村地域では“結”といわれるボランティア活動も日常化しており、それは自身の技術や能力を活かしたサービスの拡大、あるいは社会貢献活動と捉えても誤りではないだろう。労働は

地域とともにあり、そこに金銭価値を凌駕する特別な価値を見出してきたのが集落である。

また“講”は町人文化だけのものではなく集落にも存在した。“講”は助け合い募金としての役割のほかに、共済や危険準備金のような機能も持っていた。この機能を重視した仕組みに“無尽”や“頼母子講”がある。

このようにみると、自然と共に歩む第一次産業を地域経済の中心に据える農山漁村地域のコミュニティは、自然と他者からの贈与によって暮らしと経済が一体的に循環している社会と見ることにもできる。さらに、アニミズムを底流にもつ自然信仰は死者との関係性を永続させ、祭りや文化や芸能という無形の地域資源を生み出していく。地域は魂の帰る場所であり、住民は先人たちの魂と共に大いなる物語のなかで生きるのである。過去、集落とはそのような場所だった。

このような日本的贈与の思想は閉塞した市場経済に代わる新たな経済価値の萌芽を予感させてくれる。とりわけ食料の生産やケアを取り巻く労働分野は、資本主義市場とは異なる独特の経済圏で営まれる人間の活動である。

フランスの社会学者マルセル・モースの先駆的研究で示された『贈与論』は、クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss) やジョルジュ・アルベール・モリス・ヴィクトール・バタイユ (Georges Albert Maurice Victor Bataille) といった偉大な思想家たちに凄まじいほどのインスピレーションを送ったとされる。市場経済至上主義に支配された社会ではその輝きを失った日本の農村集落であるが、まなざしを“自然”の世界へと移せ

ば、そこには壮大な世界観と未知の可能性を包摂した社会が広がっている。このことから、地域コミュニティにおける内発的な経済活動を支えるのは、集落機能である可能性が高い。まさに集落の再生は今日的なテーマであるといえる。

## 5. 結びに代えて

『共済総研レポート』114号 (2011年4月) に掲載した『三河中山間地域の「いのち」と「くらし」を支える足助病院の精神』において、地域活動を支える「三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会」を紹介した。この活動は、じつは贈与論的思想を内包している。この地域に未来を照らす新しい価値が開くことを願ってやまない。

そこで参考に、大阪市立大学名誉教授の宮本憲一氏が導き出した「内発的発展の原則」を一部ご紹介したい<sup>3</sup>。

### (1) 目的の総合性

目的は安全、健康、自然の保全、美しい景観、歴史的文化財の保全、福祉・教育・文化の向上、何よりも住民の人権の確立を目的にします。

### (2) 開発の方法

地域内の資源、技術、伝統を出来るだけ活かして技術や知恵で付加価値をつけ、できるだけ複雑な産業連関をつくり、社会的剰余 (利潤、租税、貯蓄) を地元で確保して地域内に再投資をし、とくにそれを地元の福祉、教育、文化、学術の発展に寄与させています。人口衰退地域では若者が少なく、力や知恵の足りない

3 宮本憲一 (2010) 『転換期における日本社会の可能性～維持可能な内発的発展』公人の友社、pp. 55-59

ところでは広域的に都市との連帯をはかっています。

### (3) 主体は地元の自治体・企業・社会組織・住民

地域の企業、自治体、個人、協同組合、NGO、NPOなどが主体です。内発的発展といっても排外主義ではなく、人類の叡智や資金を広く活用する。しかしあくまで主体は地元であり、先の目的を果たすために外部の資金や人材の応援をうける。

これは現在の実体経済の中で、失われつつある価値や基層文化を蘇らせ、生活圏を再生しようとする積極的な取組みである。ただ目的を見れば、これまで集落機能が担ってきた役割、そこに暮らす住民が守ってきた精神と大きな相違はないように思える。ここからも地域コミュニティに未来を拓く可能性が秘められていることが窺える。今後、市町村レベルの取り組みと集落単位の活動が同時並行的に発展し、両者が共鳴しあって、地域に緩やかなキャッシュフローを生み出していくような知恵と技術が求められている。

環境の再生、生業の再生、生活基盤を支える保健・医療・高齢者介護システムの構築等を中心に据えながらも、さらに食やエネルギーなどの地産地消システムをベースに持つ住民自治圏の創造へと発展させ、人間と自然が紡いでいく維持可能な社会の姿を、具体的な活動を通して示していく必要があるように思える。そのためにも、自然と対立するのではなく、自然へと回帰していく文明の姿を具体的に描き出し、次世代へと伝承していかねければならないのだろう。

自然への回帰という言葉の中には“人間と

いう自然”を自覚するための大切な問いかけがある。人間が作り出す科学はときにこの自然と対立するが、このような対立をどのように調停していくのか、その方法によって未来は変わる。対立をさらなる科学技術によって制圧しようとするれば、自然は姿を変えて人間に向かってくるのではないだろうか。その観点からすれば、原子力エネルギーの活用もまた、科学への過信から生じる自然への挑戦に他ならない。

また、自然との関係を視界から消し去ったという意味においては経済も同様である。たとえば、物理学の法則に従えば、閉鎖空間においてエントロピーが増大すれば、分子運動は低下し、いずれ均衡状態に陥り運動は停止する。奇妙な話だが資本主義経済においてもこれと類似した現象がみられる。

国内経済が飽和状態に陥ると資本はその矛先を海外へと向けた。上述した明治期の日本は、この逃げ場所を求めて膨張する資本の内部に吸い込まれていったのである。近年では、世界経済が動揺し始めた1970年代以降、またしても資本は経済空間の拡大を求めて動き出している。このときはグローバリゼーションという方法を用いて途上国等を巻き込み、何とか産業資本を確保することに成功した。しかし現在、すでに膨張が極限にまで達した閉鎖空間の内部で世界経済はもがいている。活動空間を拡張しないかぎり資本主義経済は終焉するが、地球上には、もはやエントロピーを増大するだけの余地は残されていない。

忘れてはならないのは、このような資本の蓄積は主として環境破壊と無秩序な自然資源の乱用によって実現されてきたという、もうひとつの事実である。その代償として失われたものは、わたしたちの想像をはるかに越え

て大きい。この限りにおいて、経済もまた自然との対立の中で発展を続けてきたといえる。

この終わりのない対立を繰り返すことが、わたしたちの未来にとって有意義な選択であるか否かは、あえて問うまでもないだろう。自然と対峙しながら外へ外へと拡大するエネルギーを、自然と調和しながら歩む人間本来の社会に向けることこそ、現代を生きるわたしたちに課せられた使命ではないだろうか。

**(参考文献)**

- ・ 中沢新一 (2011) 『日本の大転換』 集英社新書
- ・ 福沢諭吉、松沢弘陽 (編纂) (1962) 『文明論之概略』 岩波書店
- ・ 内山節 (2011) 『文明の災禍』 新潮社
- ・ マルセル・モース、吉田禎吾・江川純一 (訳) (2009) 『贈与論』 筑摩書房
- ・ 宮本憲一 (2010) 『転換期における日本社会の可能性～維持可能な内発的発展』 公人の友社